

ジョン・ポーソンの建築思想における【ミニマリズム】に関する研究

—言説およびイメージコレクションに着目して—

A Study on 【Minimalism】 in John Pawson's Architectural Theory

-Focusing on his Discourse and Image Collections-

○後藤沙羅 (神戸大学大学院) *1

末包伸吾 (神戸大学大学院) *2

増岡亮 (大手前大学) *3

*1 Sara GOTO, Graduate School of Engineering, Kobe University, 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 657-8501, saragoto@people.kobe-u.ac.jp

*2 Shingo SUEKANE, Graduate School of Engineering, Kobe University, 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 657-8501, suekane@people.kobe-u.ac.jp

*3 Ryo MASUOKA, Dept. of Architecture and Arts, Otemae University, 6-42, Ochayasho-cho, Nishinomiya, 662-8552, masuoka@otemae.com

キーワード: ジョン・ポーソン, 建築思想, ミニマリズム, 言説, イメージコレクション

1. はじめに

1.1. 研究の背景・対象・目的

1960年代半ばから後半にかけてアメリカで起きた彫刻と絵画における特定の動きを指す「ミニマリズム」という語は、1990年代以降の建築界のある緩やかなまとまりを示す語として新たに定義されてきた⁽¹⁾。

本研究では、そうした「ミニマリズム」の建築家として知られるイギリスの建築家ジョン・ポーソン(John Pawson, 1949-)の言説およびイメージコレクションにおける建築思想に着目し、彼の建築思想における【ミニマリズム】の概念の特質を析出することにより、建築における「ミニマリズム」の本質の一端を明らかにし、美術分野に端を発する「ミニマリズム」が、建築分野においていかに展開されるのかについて検討することを目的としている。なお、ここでイメージコレクションとは、彼自身が撮影した写真や別の媒体から収集した写真や画像を掲載した刊行物を指す。

1.2. 既往研究と本研究の位置付け

彼の建築思想や建築作品に関する既往研究⁽²⁾は存在するが、彼の全言説およびイメージコレクションを対象とした分析を通して、彼の建築思想における【ミニマリズム】の概念の特質の析出を企図するものはみられないことから、本研究に独自性があると考えられる。なお、言説分析の方法は筆者らによる研究⁽³⁾の方法に準じている。

1.3. 研究の構成

第1章ののち、第2章ではジョン・ポーソンに関する一般的考察を行う。第3章では彼の言説を分析することで彼の【ミニマリズム】の概念構成を明らかにする。第4章では彼のイメージコレクションを分析することで彼の【ミニマリズム】の概念構成をより詳細に捉える。以上を踏まえ、第5章において、彼の建築思想における【ミニマリズム】の概念の特質を析出し、さらに「ミニマリズム」が建築分野においていかに展開されるのかについて検討を行う。

2. ジョン・ポーソンの概要および一般的考察

2.1. ジョン・ポーソンの概要

1949年にイギリスで生まれたポーソンは、20代の頃に4年間日本に滞在している。日本独自の美に触れ、さらにインテリアデザイナーである倉俣史朗(1934-1991)の元で働く中で、建築家を目指すこととなる。帰国後AAスクールで学んだのち、1981年に自身の事務所を設立している。

彼は、自身の建築思想を綴った書籍や作品集に留まらず、イメージコレクション、料理本まで様々な種類の書籍を出版しており、アートや写真、色彩、建築空間で営まれる生活そのものについても深い関心を寄せていることがわかる。

2.2. ジョン・ポーソンに関する一般的考察

ハル・フォスターは、基本的な幾何学的図形への単なる還元ではなく、持続する複合態を用意するための還元が「ミニマリズム」であり、幾何学的形態を持つ構造体そのものと、異なる視界から得られる多種多様な現象としての効果との間の緊張関係が「ミニマリズム」を凡庸にすることを阻止しているとする。その中で“フェティッシュなまでにエレガント”であるとしてポーソンに触れている⁽⁴⁾。

ハリー・F・マルグレイブらは、「ミニマリズム」の建築家の共通点は、“新しい素材とその感覚的な効果の開発、盛期モダニズムから譲り受けた建設の形態をシンプルなディテールでまとめる術、建築経験そのものの現象学的性質への興味”であるとする。その中で建築の伝統的規則に根差す傾向を“ネオ・モダニズム”と呼び、ジョン・ポーソンを位置付け、“単に簡素なだけでなくバロック的形態を用いながらきわめて宗教的”で、“表面の贅沢や装飾の快楽を放棄して、内部空間に深く焦点を当てて実現されており、つねに修道士のように禁欲的”であると評している⁽⁵⁾。

このように、「ミニマリズム」と呼ばれる建築家の作品には、単なる形態や意匠の単純化を超え、空間での現象や効果といったものが存在し、その中でも彼の作品は“フェティッシュ”、“エレガント”、“宗教的”、“禁欲的”であると形容されており、特に一目を置かれているといえよう。

3. ジョン・ポーソンの言説にみる

【ミニマリズム】に関する考察

本章では、ジョン・ポーソンの言説を対象に、建築思想の分析を行う。

3.1. 分析方法

ジョン・ポーソン事務所が公式に発表している全著作のうち、彼の建築思想に関する言説が確認できる全資料(表1)を対象に分析を行う。【ミニマリズム】に関する重要言説を抽出したのちに項目を析出し(表2)、意味の階層性の視点から検討、KJ法に準じて鍵語に整理(表3)することにより、彼の【ミニマリズム】に関する概念構成を捉える。

なお言説の翻訳は筆者らによるものであり、表3に示す鍵語には、原語の存在しているものには日本語に原語の併記を行った。また本文中の鍵語はそれぞれ第1水準を【】、第2水準を《》、第3水準を□、第4水準を◇、第5水準を□で示し、引用言説には“ ”を付す。さらに引用言説の末尾の()内には論考番号-言説番号を記す。

表3が示すように、彼の【ミニマリズム】の概念における第2水準の3つの鍵語は、彼の思想の3つの表現方法、すなわち、概念(文章)、イメージコレクション(写真や絵)、空間(建築作品)と対応している。また、各第2水準の鍵語における第3水準の鍵語は、本質、形成手法、効果(表象)の3つから構成されており、さらに下位の第4水準、第5水準の鍵語が存在している。

以降では、第2水準から第4水準の全ての鍵語について、主要な重要言説を引用し、順に考察を加える。

表1 分析対象文献

番号	出版年	書籍名	出版社
1	1995	Critic	Daishinsha Inc.
2	1996	minimum	Phaidon Press
3	2001	Architecture of Truth	Phaidon Press
4	2005	El Croquis 127 John Pawson 1992-2005	El Croquis
5	2011	El Croquis 156 John Pawson 2005-2011	El Croquis
6	2012	A visual Inventory	Phaidon Press
7	2017	Spectrum	Phaidon Press

表2 【ミニマリズム】に関する項目の抽出例

番号	原文	訳	構造化	項目
2-25	Twelfth-century Japanese writers looked for the positive qualities to be found in poverty, making it synonymous with a sense of freedom.	12世紀の日本の書物では、質素さと自由という感覚が同義に捉えられ、そこに著者の、貧しさに対する積極的な姿勢を見ることができ	質素さと自由は同義に捉えられる。	質素さ 自由

表3 【ミニマリズム】に関する鍵語一覧

第1水準	第2水準	第3水準	第4水準	第5水準	
ミニマリズム	基礎概念 simplicity	simplicityの本質	simplicityの必要条件	質素さ poverty ある特性	
			質素さの美德 the virtues of poverty	自由 freedom 正しさ right 審美的価値の生成 generating aesthetic value 精神の浄化 purification the spirit	
			洗練 refinement	削除 elimination 圧縮 compression 完璧さ perfection	
		simplicityの形成手法	simplicityの効果	考えるための余白 room to think 混沌の排除 clear up the chaos 本質への還元 reduction to essence	
	イメージコレクション	イメージコレクションの本質	イメージコレクションの形成手法	学習プロセス learning process	瞬間的記憶 momentary memory 網羅的記憶 covering the entirety
				3つのイメージコレクション	撮影 take a picture キュレーション curation simplicityに帰結する 資質のコレクション qualities that are likely to be conducive to simplicity 視点のアーカイブ archive of a way of looking 色彩的配置 the chromatic arrangement
				イメージコレクションの効果	simplicityの概念の結晶化 crystallize notion of simplicity 思考の糧 food for thought 創造的思考への働きかけ
	空間	空間の本質	空間構成要素 the building blocks of space	空間構成要素	自然光 daylight 素材 materials 幾何学 scale スケール proportion 色彩 color
				空間の理解 understanding space	思考の糧 food for thought 瞬間の記憶 remembering the moment 美的感覚 aesthetic strands
				体験の質 quality of experience	生活の儀式のための コンテキストの生成 generating contexts for the rituals of its users' lives 実体への問いかけ
空間の形成手法		対象	対象	かたち form 表層 surface	
			操作	調和 harmony 還元 reduction 限定 exclusive 量感 harmony 秩序 order 温もり warmth	
		空間の表象	empty spaceの興奮 excitement of empty space	静寂と安定 quiet and clam 本質の体験 the experience of essence	

3.2. 《基礎概念:simplicity》に関する言説の分析

“(ミニマリズムにおいて) 私たちが本当にしようとしていることは、現在を新しく魅力的に感じようとするのですが、未来のアイデアに気を取られているのです。(中略) これこそが、豊かさと官能のための膨大で逆説的な可能性を秘めた simplicity の美学が提供するものだとは私は信じています。(4-32)”

彼は《simplicity》という概念を基礎として【ミニマリズム】の概念を構築しているといえる。一方で、以下のようにも述べることでその概念の明確な定義を避けている。

“simplicity という概念の定義は簡単ではない。それはとらえどころのない性質のもので、歴史的、地理的に広がったさまざまな文化でさえも、長い時代にわたる魅力を追求する過程でこの概念を用いながら、その本質を規定することはできなかった。(2-16, 2-17)”

上記を踏まえ、彼が《simplicity》を感じるものとして挙げる具体的な事物に関する言説から [simplicity の本質], [simplicity の形成手法], [simplicity の効果] の3つの鍵語を抽出しそれぞれについて分析を行うことで、彼の語る《simplicity》について考察を行う。

3.2.1. [simplicity の本質] に関する言説の分析

1) <simplicity の必要条件>

“古い教会、橋や何の変哲もない石段の静寂さの背後にある simplicity の特質とは何であろうか。様々な時代に、富を顕示することに対する道徳的な反感があった。貧しさには美徳が備わっていると見なされている。(2-145)”

教会や橋を挙げ、[質素さ] が部分的には《simplicity》の特質であると捉える彼は、以下のようにも述べる。

“しかし、質素な工芸品の全てが simplicity の特質を備えているわけではない。シンプルな碗は、完結した形をしている。一方でそれは審美的には退屈で無価値なものにもなり得る。(2-90)”

彼は《simplicity》の特質が他にもあるとしながら、それ以上の明言は避けている。ここでは [質素さ] 以外の《simplicity》の特質を [ある特質] という語で捉える。

2) <質素さの美徳>

“12世紀の日本の書物では、質素さと自由という感覚が同義に捉えられ、そこに質素さに対する積極的な姿勢を見ることができる。(2-64)”

彼は、一般的には負のイメージを持つ [質素さ] を [自由] と同義に捉える感性に共感する。さらに以下のようにも述べることで、[質素さ] と [自由] を結びつける感性は審美的な感性へと発展し ([審美的価値の生成]), それは現代の様々な文化においても重要な意味を持つとしている。

“それ (質素さに対する積極的な姿勢) は偉大な茶道の達人である千利休によって更に審美的な感性へと発展させられた。(中略) この感性は、人々を取り巻く環境が大きく変わった今日でさえも、4世紀前の黄金時代にも増して、重要な役割を持つようになっている。(中略) この流れは、あらゆる国々、全ての文化に渡る。(2-66)”

また彼は以下のようにも述べている。

“(無私無欲や世俗的でないことは)ほとんどすべての宗教的、精神的宗派によって提唱され、精神を浄化し、信奉者に内なる静寂の感覚を与える美徳として表象されてきた。(2-15)”

彼はこの概念が道徳的側面に応用される際に [精神の浄化] が生じるとしている。

3.2.2. [simplicity の形成手法] に関する言説の分析

1) <洗練>

“ミニマムは人工的に創造された物が、引き算によってはそれ以上の可能性を期待することが不可能となったときの完成された姿と規定することができる。(2-4)”

彼は [削除] をそれ以上の可能性を期待できなくなるまで行うことが必要であるとする。

“そしてその行為、削除、圧縮を続けていくと、あるとき壁を超え、次元の異なる世界へと踏み込むことになる。そこであなたは空虚さではなくむしろ豊かな感覚を覚えるのである。(2-118)”

彼は [圧縮], [削除] を繰り返すことで《simplicity》が得られると考えており、さらに以下のようにも述べることでミースとコルビュジェを比較し、完璧であることの重要性を示す。

“ミースは一つのことを磨き上げることに長けていた。私はコルビュジェの建築を訪れ、それを完璧だと思うことはまずない。(2-37)”

また、以下のようにも述べている。

“simplicity を会得するのは、ちょうど芸術において、きちんとした描写の技法を習得していないと抽象化の技法が会得できないのと同じく、たやすいことではない。それは注意力、思考、知識と忍耐によって習得するものである。(2-35)”

彼は、注意力、思考、知識と忍耐をもって、[圧縮], [削除] をそれ以上の結果が期待できなくなるまで“完璧”に繰り返すことで《simplicity》が得られると捉えていた。

3.2.3. [simplicity の効果] に関する言説の分析

“わびの精神は所有と消費が重荷であるとし、生活を豊かにするよりもむしろ簡素なものにする。雑念がなくなることによって、考えるための、或いは理解するための余白が生まれる。(2-63)”

彼は余分な所有を削ぎ落とすことで雑念が排除され ([雑念の排除]), その結果 [考えるための余白] が生まれるとしている。

“最小限の生活は常に解放感をもたらす、つまらないことに気を取られることなく、存在の本質に触れる機会を提供してきた。(2-8)”

彼は、《simplicity》のもたらす最小限の生活は、存在の本質に触れる機会を与えてくれる、つまり《simplicity》には物事をその存在の本質へと還元する効果 ([本質への還元]) があると考えている。

3.3. 《イメージコレクション》に関する言説の分析

“私には視覚的な記憶力があり、自分の考えや経験を画像で記録するという強い直感があります。(7-21)”

彼は、自分の考えや経験を画像で記録しており、イメージコレクションとして残している。さらに自身の設計活動におけるイメージコレクション役割について、以下のようにも述べている。

“カメラを使うことは、日常生活に対する最も合理的な反応だと思います。建築と同じで、重要なのは根底にあるアイデアです。(6-44)”

“本書は、simplicity という概念について、具体的なイメ

ージを用いていくつかの考えを結晶化させる試みである。(2-2)”

これらの言説から彼のイメージコレクションは、彼の思想の根底にあるアイデアの表れ、つまり言語化しきれない思想を表現するものであり、彼の【ミニマリズム】という概念を理解する上で重要な資料のひとつであるといえる。

以下において、彼の《イメージコレクション》に関する言説を [イメージコレクションの本質], [イメージコレクションの形成手法], [イメージコレクションの効果]の鍵語に分類し分析を行う。

3.3.1. [イメージコレクションの本質]に関する言説の分析

“私にとって重要なのは、すべてを記録しておかなければ、その瞬間は永遠に失われてしまうという感覚です。(6-7)”

“(写真は,) ユーモアは建築ではなくその瞬間にあるという事実の証拠でもあるのです。(6-36)”

彼はその瞬間を画像として永久的に記録するために写真等のイメージを活用していることがわかる([瞬間的記憶]).

“カメラは、(中略)すべてをキャッチする、多面的な道具なのです。時々、一連の写真を見ていて、その時には見えなかったものをイメージの中に見つけることがあります。

(中略) 建築の世界でも、このような「予期せぬ、しかしセレンディピティ」な要素が起こることがあります。(6-28)”

彼はまた、写真はその時見えていなかったものまでを網羅的に捉えるメディアであるとしている。さらに、その結果写真を見返す中で思いもしなかったような発見があり、それは建築にも共通することであるとしている。

3.3.2. [イメージコレクションの形成手法]に関する言説の分析

1) 〈学習プロセス〉

“データを収集し、アーカイブを蓄積することは、単純に楽しいことですが、デザイン上のあらゆる決定の意味を理解し、その知識を新しいプロジェクトに生かすという意味でも、学習プロセスを継続しなければなりません。(6-12)”

彼はイメージコレクションの制作を、設計活動における〈学習プロセス〉であると考えている。さらに、以下のようにも述べており、彼はその瞬間を記憶し〈学習プロセス〉に活かすために頻繁に〔撮影〕という行為を行なっていることがわかる。

“毎日家の写真を撮り続け、考えられる限りの光の状態や使い方を写真に収めています。(6-13)”

さらに彼は以下のようにも述べる。

“私は、キュレーションという行為に興味があります。どのルールが最も厳格な結果を生むかを見極める挑戦に興味します。(7-31)”

“私は収集、編集、整理を伴う作業に惹きつけられ、これらのプロセスがいかに豊かな経験となり得るかに興味を抱きます。(7-30)”

彼はイメージの収集、編集、整理などの〔キュレーション〕という行為を通して、理解を深めることから、それを〈学習プロセス〉としているのである。

2) 〈3つのイメージコレクション〉

彼が発表しているイメージコレクションは3編あり、以下のようにそれぞれで作成された目的や役割が異なる。

“長きにわたり(中略)この(simplicityの)概念を用い

ながら、その本質を規定することはできなかった。しかし、この概念に帰結する資質は多く存在する。(2-17, 2-18)”

上記は『minimum』(1996)に掲載されている136のイメージについて述べたものである。彼は、これらのイメージは《simplicity》に帰結する資質であるとしており、そういった資質をコレクションすることで《simplicity》という概念の特質を明らかにしようとしている。このイメージコレクションを以下では[simplicityに帰結する資質のコレクション]とする。

“この写真集に収録された136組の画像は、ひとつの視点、ひとつの見方のアーカイブを構成しています。(6-46)”

上記は『A Visual Inventory』(2012)に掲載されている136組のイメージからなるイメージコレクションについて述べたものである。このイメージコレクションを以下では[視点のアーカイブ]とする。

“これらのイメージの色彩的な配置の基礎となる方法論は、私の好みや作業方法に関する根本的な真実を体現しています。(7-29)”

“色だけを理由に写真を隣同士にセットすると、一見全く異なるイメージの間で新しい反射関係が生まれます。脳は物語やつながりを自然に作り出すが、これは創造的思考に内在するものです。(7-42)”

上記は『Spectrum』(2012)に掲載されている320のイメージからなるイメージコレクションについて述べたものである。色彩に着目しイメージを配置することによって、創造的思考に内在する脳の作用を引き出そうとしている。このイメージコレクションを以下では[色彩的配置]とする。

3.3.3. [イメージコレクションの効果]に関する言説の分析

彼は『minimum』(1996)の冒頭で以下のように述べていることから、[simplicityに帰結する資質のコレクション]は[simplicityの概念の結晶化]の役割を担うといえる

“本書は、simplicityという概念について、具体的なイメージを用いていくつかの考えを結晶化させる試みである。(2-2)”

『A Visual Inventory』(2012)では以下のように述べていることから、[視点のアーカイブ]は[思考の糧]となりうる瞬間を切り取って記録したものであることがわかる。

“私の作品に流れる美的感覚は一貫していますが、デザインに影響を与えるものは多岐に渡り、ありそうもないものであっても思考の糧になることがあります。(6-31)”

『Spectrum』(2012)では以下のように述べていることから、[色彩的配置]は[創造的思考への働きかけ]を目的としていることが推察される。

“([色彩的配置]を行うと、)脳は物語やつながりを自然に作り出しますが、これは創造的思考に内在するものです。(7-42)”

3.4. 《空間》に関する言説の分析

“私は常に自分の行為を建築と考えてきた。それは、物理的に空間を創造することなのである。(2-103)”

彼は、建築とは物理的に《空間》を創造することであり、それこそが自分の行為の本質であると捉えていることがわかる。彼の《空間》に関する言説を[空間の本質], [空間の形成手法], [空間の効果]の鍵語に分類し分析する。

3.4.1. [空間の本質] に関する言説の分析

1) <空間構成要素>

“空間を構成する永遠の要素は、光、素材、スケール、プロポーションです。(6-32)”

彼は、[素材]、[スケール]、[プロポーション]、[光]を<空間構成要素>として挙げている。

“実は、私の作品を含め、色彩を抜きにして建築を語ることはできません。(中略) 光さえあれば、すぐに色彩が生まれます。(7-3)”

上記より、[色彩]も彼にとっての<空間構成要素>のひとつであるといえる。

2) <空間の理解>

彼は『A Visual Inventory』(2012)にて以下のように述べており、<空間の理解>において、瞬間を捉え記録すること([瞬間の記憶])を大切にしていることがわかる。

“（写真は、）ユーモアは建築ではなくその瞬間にあるという事実の証拠でもあるのです。(6-36)”

“私にとって重要なのは、すべてを記録しておかなければ、その瞬間は永遠に失われてしまうという感覚です。(6-7)”

さらに彼は以下のようにも述べている。

“空間を構成する永遠の要素は、光、素材、スケール、プロポーションです。これ([視点のアーカイブ])は、私が捉えようとしている珍しいディテールとありそうもない並置の例です。(6-32, 6-33)”

彼にとって[瞬間の記憶]は<空間構成要素>である[素材]、[スケール]、[プロポーション]、[光]に着目して行われているといえる。さらに彼は『Spectrum』(2012)において以下のように述べる。

“私は、様々な光の条件下でそれを見て、その色のスペクトルをすべて体験して、初めて建築空間を本当に理解できるのだと思うようになりました。(7-4)”

<空間の理解>において[色彩のスペクトルの体験]は不可欠なものであるとしていることがわかる。

3) <体験される空間>

“私は人々に見るための視点を与えるような建物のアイディアを追い求めている。(中略) それは実体に対する問いかけなのだ。(2-112)”

彼は建築を設計する際に[実体への問いかけ]を可能にするようなデザインアイデアを追い求めていることがわかる。さらに彼は以下のようにも述べている。

“建築とは、市民的、家庭的、社会的、感情的なものを問わず、ユーザーの生活の儀式のための文脈を作り出すものである。(6-35)”

“建築は、あるべき姿を物理的に表現したものです。形は特定のファッションに従うのではなく、特定の生活に従うのです。(4-4)”

建築とは生活に従うべきものであり、[生活の儀式のための文脈の生成]が建築の果たすべき重要な役割であると考えていることがわかる。

3.4.2. [空間の形成手法] に関する言説の分析

1) <対象>

“だがそれ(simplicity)が実現されると、空間には際立ったセンス、純粋さと深い関わりがある伝統建築の価値を体現していると思わせるような、かたちと表層というクオリティが与えられる。(2-141)”

彼は空間の形成手法として操作を与える<対象>を、[かたち]、[表層]の2つで考えていることがわかる。

2) <操作>

“それら全てを抑え込み、白い天井をシンプル浮遊する面に還元することは非常に難しい仕事である。(2-140)”

上記のような空間を形成する<操作>に関わる言説を収集し、整理したところ、[調和]、[還元]、[限定]、[量感]、[秩序]、[温もり]の6つの鍵語が導出された。

3.4.3. [空間の効果] に関する言説の分析

1) <empty spaceの興奮>

“私が探し求めるものはempty spaceの興奮である。空虚さは、付帯的な断片によって本質が墮落したり隠蔽されたりすることを防ぐことで、我々にあるがままの空間、あるがままの姿の建築を見せてくれるのである。空虚はものを所有することによる煩わしさから我々を解放し、瞑想のための精神的、物理的空間を創り出し、瞑想のための静寂と安定を与えてくれるのである。(2-158)”

彼の探し求めるものは、<empty spaceの興奮>であり、そこには[静寂と安定]の世界が広がり、それは本質にまで還元されたあるがままの空間をみることができる([本質の体験])であると考えられる。

3.5. 考察

以上の分析から得られた概念構成を図1に示す。

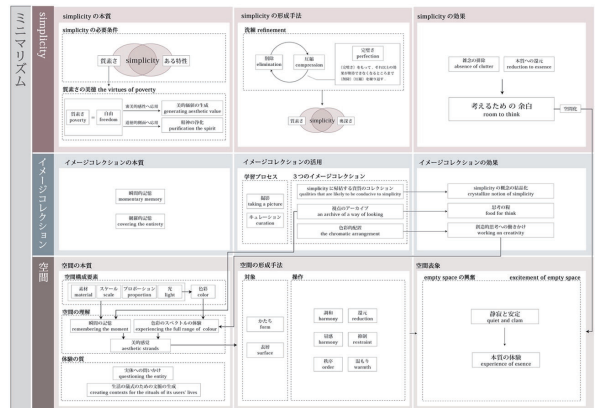


図1 ジョン・ボーソンの言説にみる【ミニマリズム】の概念構成図

彼の【ミニマリズム】における基礎概念といえる《simplicity》は、[質素さ]と[ある特性]を兼ね備えた事物に宿る特性であり、[考えるための余白]を生み出すものであると考えられる。この[ある特性]については次章のイメージコレクションの分析ののちに考察を行う。

彼のイメージコレクションは、言語化しきれない思想を表現するものであるといえる。彼が発表しているイメージコレクションは、[simplicityに帰結する資質のコレクション]、[視点のアーカイブ]、[色彩的配置]と表現することができ、各イメージコレクションによって作成された目的や役割が異なることが明らかとなった。

さらに彼は建築とは物理的に《空間》を創造することであるとしており、それこそが自身の行為の本質であると捉えている。具体的には、[調和]、[還元]、[限定]、[量感]、[秩序]、[温もり]といった<操作>を通じた[静寂と安定]、さらにその先の[本質の体験]の実現を目指している。

4. ジョン・ポーソンのイメージコレクションに

みる【ミニマリズム】に関する考察

本章では、ポーソンが独自の視点で収集したイメージを整理して出版した3編のイメージコレクションを対象に、彼の建築思想の分析を行う。

4.1. 『minimum』(1996)に関する分析

4.1.1. 分析方法

『minimum』(1996)に掲載された136のイメージを分析対象とする。まずはこれらのイメージを被写体によって分類し、その分類の中での特色から鍵語を導き整理することで(表4)、『基礎概念: simplicity』における「ある特質」を捉える。なお、新たに得られた第6水準にあたる鍵語は、‘余白’を用いて示す。

表4 [simplicityに帰結する資質のコレクション] から抽出した鍵語

被写体の分類		イメージ数	鍵語
分類1	分類2		
建築	外観	32	マッシュ・周囲との調和・幾何学面の重層・奥行き・反復
	内観	27	陰影のコントラスト・ぼかし 純粋な幾何学・奥行き・反復
	ディテール	6	凹凸・ぼかし・色むら
	平面図	2	純粋な幾何学・奥行き・反復
都市	-	3	純粋な幾何学・奥行き・反復
ランドスケープ	-	18	マッシュ・反復・奥行き・水平線
土木	-	4	純粋な幾何学・水平線・反復・マッシュ
アート	インスタレーション	8	純粋な幾何学・反復・奥行き・ぼかし
	絵画	11	反復・純粋な幾何学・ぼかし・余白
	オブジェ	6	奥行き・反復・純粋な幾何学・ぼかし
	工芸	8	陰影のコントラスト・ぼかし

4.1.2. 分析結果と考察

分析の結果、「粗さ」や「アノニマス」といった‘過剰の排除’、「反復」や「純粋な幾何学」といった‘秩序’からなる「質素さ」の特性といえるもの以外に、「反復」や「マッシュ」といった‘その先の想像の喚起’、「奥行き」や「ぼかし」といった‘単一の中の奥深さ’といった特性も見出された。さらにそこには目に見えないものを想像力で補うよう促す「想像力の喚起」の効果があることが確認できた。こうした特性は「奥深さ」と表現することができることから、前章までの分析で特定しきれなかった「ある特質」は「奥深さ」に置き換えられよう。つまり『基礎概念: simplicity』の必要条件は「質素さ」と「奥深さ」であることができる。

以上の概念構成を図示したものが図2である。

なお、これ以降の図における着色部は、各考察を通して新たに得られた部分であり、図や表で用いる画像は各分析対象のイメージコレクションより引用している。

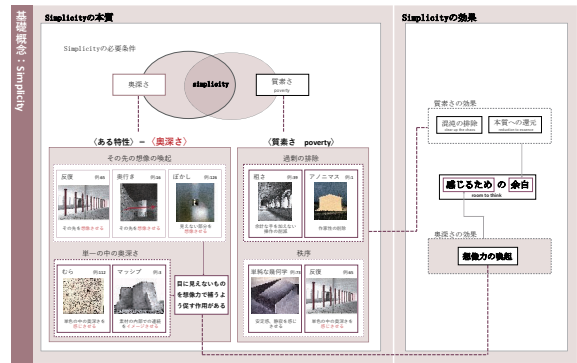


図2 [simplicityに帰結する資質のコレクション] にみる建築思想の概念構成図

4.2. 『A Visual Inventory』(2012)に関する分析

4.2.1. 分析方法

『A Visual Inventory』(2012)に掲載された、彼の設計活動の根底にあるアイデアのアーカイブとしての136組のイメージを分析対象とする。それぞれの特徴、ペアのイメージ間の関係を分析し、ペアの主題を導き(その一例を表5に示す)、さらに全ペアの主題を分類、整理し鍵語を析出することで、彼の設計活動の根底にあるアイデアについて明らかにする。

表5 [視点のアーカイブ] から抽出した主題の例

ペア番号	イメージ	特徴	関係性	主題
ペア 55		人々のプライベートな世界を垣間見ることができる雑多な景色	対比	個々の要素の配置に関する、明確な論理性の有無
		視界全体にペイント、植栽、網状の線と箱がグリッド状に重なる		
ペア 94		毎年1日だけ赤いツバキの花びらで覆われるプロイヤー邸の庭	共通	静的な要素の上に広がる刹那的な風景の時間的対比
		格子状の石板静かな背景は、葉やバラの花びらの繊細な色合いを映し出すのに最適		

4.2.2. 分析結果と考察

分析の結果、各ペアから導いた主題から彼が自身の「思考の糧」とするために「瞬間の記憶」として記録しているものは実に多種多様であることが明らかとなった。実際に彼は以下のように述べているが、今回の分析結果はそれを裏付けるものであるといえる。

“私の作品に流れる美的感覚は一貫していますが、デザインに影響を与えるものは多岐に渡り、ありそうもないものであっても思考の糧になることがあります。”(7-20)

さらに全ペアの主題を分類、整理したところ、[実体への問いかけ]として‘コントラスト’や‘物語’の要素が新たに得られ、[調和]や[還元]や[量感]からなる〈操作〉の概念について裏付ける結果が得られた。そしてそれらによる空間表象として、[静寂と安定]の他に[知覚の増幅]が目指されていることが明らかとなった。また、[本質の体

験) に関しては新たに‘時間的深み’, ‘心理的深み’, ‘空間的深み’ という鍵語が導かれた。

これらの概念構成を図で示したものが図3である。

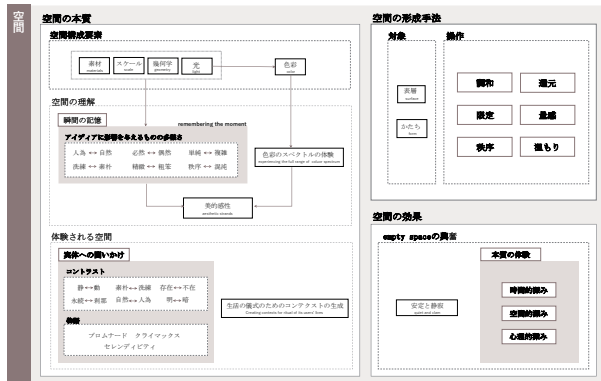


図3 [視点のアーカイブ] にみる建築思想の概念構成図

4.3. 『Spectrum』(2012) に関する分析

4.3.1. 分析方法

『Spectrum』(2012)に掲載された, 色彩に着目して彼が収集し編集した320のイメージを分析対象とする. 言説から導いた分析項目に基づき各イメージを分析, 整理する(その一例を表6に示す)ことで, [色彩的配置]の効果である[創造的思考への働きかけ]を具体的に捉える。

表6 [色彩的配置]分析シート例

ペア番号	イメージ	色彩データ (平均)			被写体		パターン
		R	G	B	主要	副次的	
3		226	223	220	タイル	コンクリート	共通
		220	218	209	花	大理石	
89		126	127	154	ぶどう畑	空	連続
		81	90	122	海	空	

4.3.2. 分析結果と考察

分析の結果, [色彩的配置]は, 見る人に色彩の多様性, 副次的な被写体の色彩に注目するよう促したり, 隣り合うイメージ間に関係性を想起させたりする作用があることが確認できた。

これらの作用は, 色彩に関する固定観念の排除や, 色彩を感知する対象の幅の拡張, 要素間の関係性の想起を引き起こし, その結果, [創造的思考への働きかけ]の要素として‘色彩の奥深さの知覚’, ‘想像力の喚起’の効果を生むことが新たに明らかとなった. またこれらの効果は実空間において[色彩のスペクトルの体験]を促す役割を持つ。

以上の概念構成を図示したものが図4である。

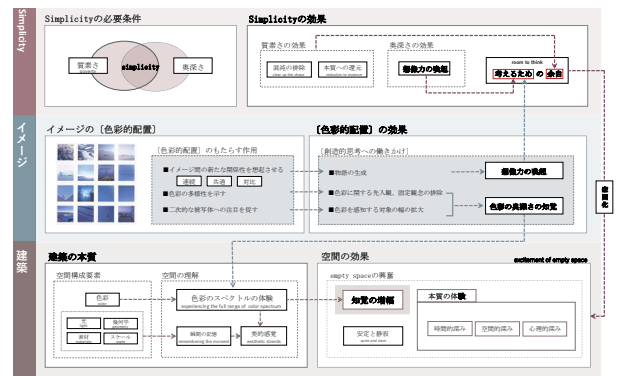


図4 [色彩的配置]にみる建築思想の概念構成図

5. まとめ

以上の分析および考察から導いたポーションの建築思想の概念構成を図示したものが図5である。

彼の【ミニマリズム】における基礎概念といえる《simplicity》は, ‘過剰の排除’や‘秩序’からなる[質素さ]に加えて‘その先の想像の喚起’や‘単一の中の奥深さ’といった[奥深さ]を兼ね備えた事物に宿る特性である. そして[奥深さ]が[想像力の喚起]を誘引することで[考えるための余白]を生み出しているといえる(『minimum』の分析). また彼は時間を切り取った[瞬間の記憶]として多種多様な事物を[視点のアーカイブ]として記録しており, そこでは(体験される空間)を目指した(操作)を通して‘時間的深み’, ‘心理的深み’, ‘空間的深み’といった[本質の体験]のための具体的なイメージでの表現を試行している(『A Visual Inventory』の分析). さらに彼は[色彩的配置]がもたらす[創造的思考への働きかけ]を通して[色彩の奥深さの知覚], [想像力の喚起]といった効果を生じさせることを意図しており, これらの効果が[考えるための余白]へと連結している。(『Spectrum』の分析).

彼は【ミニマリズム】の概念を, 文章による主張だけでなく, その資質や視点を画像として記録し, 編集することで, 人間の視覚的経験を通してその概念の本質に気づかせることを目指しているといえる。

彼にとっての【ミニマリズム】の概念は, 身近な様々なスケールの事物の中に見出される, 共通の要素やそれらの関連から得られるものであり, それは‘想像力の喚起’を誘発し, 我々に[考えるための余白]を与えるものであるといえよう. またそれは我々に《空間》の様々な深みを包含した[本質の体験]に向かわせるものであるといえる。

建築における「ミニマリズム」では, 作者の意図を重視した作品から利用者によって体験される空間への転換の様相を呈しているといえるが, 彼は《simplicity》の可能性を追求し, 人間の感性のより深いところに訴えかける空間の創出を目指すべく, 文章や建築作品のみならず, イメージコレクションという媒介も含めて表現を展開している点で他のミニマリズム建築家と一線を画しているといえる. 言葉でも空間でもないイメージコレクションは, 言語や時代, 地域を超えて, ある美的感覚や知覚を共有できるものであるといえよう. 彼の作品は, その表層や醸し出される

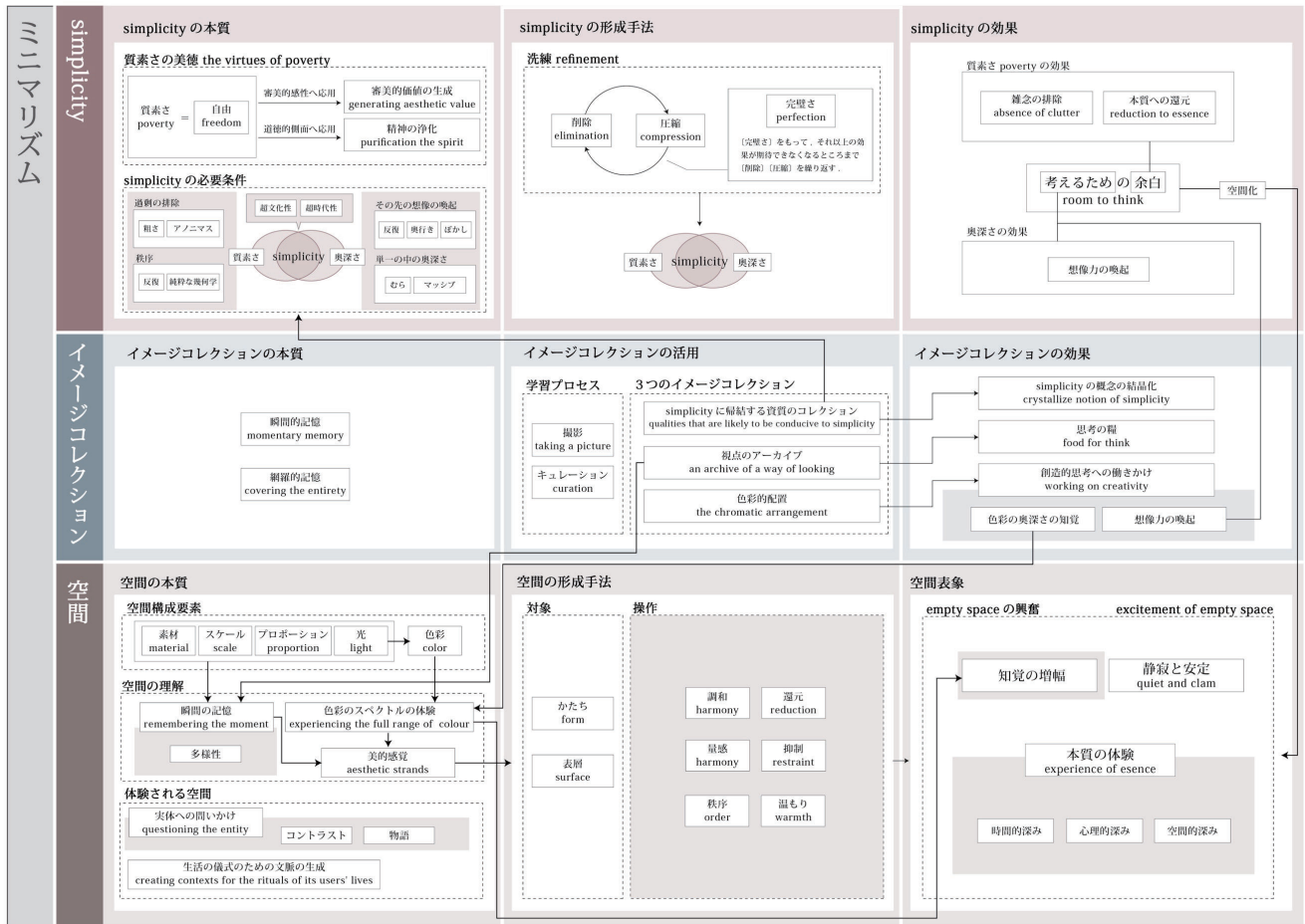


図5 ジョン・ポーソンの言説・イメージコレクションにみる【ミニマリズム】の概念構造図

空気感から“フェティッシュ”，“エレガント”，“宗教的”などと評されるが，彼の《simplicity》の概念は，あらゆる時代や文化に潜み，人間の感性の根底に深く根付くことで，我々により深い感動や心地よさをもたらすと見える。

物質的な豊かさがもたらした混沌と共にあり，常に最新のものへの飢餓感が煽られる現代において，彼の【ミニマリズム】の概念は人間の感性のより深く根源的などころでの共鳴を目指すものであることから，人間の生活を基盤とする建築分野における展開の可能性は大いに期待されよう。

なお，今後はこうした彼の思想がいかに実際の空間に展開されたのかについて明らかにするため，彼の建築作品を対象に分析および考察を行う予定である。

謝辞

本論文は次の論考の一部に加筆修正を加えたものである。加藤亜海，末包伸吾，後藤沙羅，増岡亮：ジョン・ポーソンの建築思想および建築作品における【ミニマリズム】に関する研究 -1987-2018年における言説・イメージコレクション・住宅作品に着目して-，日本建築学会近畿支部研究報告集，第63巻，pp.401-404，2023.6

文献

- (1) ハリー・F・マルグレイヴ，デイヴィッド・グッドマン 著，澤岡清秀 訳：現代建築理論序説 1968年以降の系譜，鹿島出版会，p.314，2018
- (2) ク・マンジェ，イ・ジョンウク：現代の屋内空間での新しい単純性の研究-John Pawsonの作品を中心に，韓国室内デザイン学会論文集，vol22，No.1，pp.38-46，2013.2，他
- (3) 末包伸吾：主題とその構成にみる建築家ルドルフ・シンドラーの論考の特質とその変遷，日本建築学会計画系論文集，vol.73，No.627 pp.1155-1164，2008.5 後藤沙羅，末包伸吾，増岡亮：伊丹潤の言説における【現代日本】の《建築》に関する思想，日本建築学会計画系論文集，vol.87，No.799，pp.1774-1785，2022.9
- (4) ハリー・F・マルグレイヴ，デイヴィッド・グッドマン 著，澤岡清秀 訳：現代建築理論序説 1968年以降の系譜，鹿島出版会，pp.331-335，2018
- (5) ハル・フォスター（瀧本雅志訳）：アート建築複合体，鹿島出版会，pp.314，334-335，2014